

# 学校における効果的なICT活用の促進 ～ 指導主事，教頭による支援について ～

学籍番号 229105

氏名 川俣 尚之

主指導教員 木原 俊行

副指導教員 陸奥田 維彦

S市における「効果的なICT活用」とは，教員が一斉授業や協働学習，個別学習で，児童に，目的に応じて児童用PCを活用させることである。それらの促進のために，指導主事の取組を1章から3章，教頭としての営みを4章から7章で述べる。

## 1. S市の学校におけるICT活用に関する現状と課題

S市の教育センターの指導主事として，令和4年度より，「GIGAスクール構想」をテーマにして研究を始めた研究指定校A（以下，指定校A）を支援することとなった。指定校Aに対して，教員対象のアンケート調査や学校長・研修主任へのインタビュー調査，授業観察等を実施した。指定校AのICT活用における課題として，「授業での効果的なICT活用が不十分であること」や「教員間でICT活用スキルやICT活用へのモチベーションに差があること」が挙げられる。

## 2. 教員間を「つなげる」指定校Aへの支援

指定校Aの課題を解決するために，指定校Aが実施する「1学期の校内研修」「中学校区合同研修会」「研究授業等・協議会」に対して，指導主事として，コンサルテーションを行った。さらに，指定校Aの3つの取組に関わって，他校の教員を「つなげる」支援も行った。1学期の校内研修では，指定校Mの教員の協力により，指定校Aにおいて中期的な研修計画が立案された。また，GIGA委員会の組織化，児童の朝のログイン習慣などの研究のフレームが構築された。著者による中学校区合同研修会の企画・運営においても，指定校Aの教員が他校の教員と交わる機会を設けた。それらを通じて，指定校Aの教員の研究に対するモチベーションを向上させることができた。4回実施された研究授業等・協議会においては，指導助言や事前指導案検討会への参加を通して，指定校Aの授業者に効果的なICT活用の実践を促すことができた。

## 3. 指定校Aへの支援の総括的評価

指定校Aの教員の協議会等における振り返りの文章記述やS市教育センターが令和4年12月に実施したGIGAスクール構想に係るアンケート調査をもとに，著者の支援を総括的に評価した。指定校Aへのコンサルテーションを通して，指定校Aの教員が児童用PCの活用頻度を増加させたり，ICT活用スキルや授業力を向上させたりすることができた。しかし，協働学習での効果的なICT活用には課題が見られた。指定校Aの教員が協働学習におけるICT活用の実践力を高められるように，研修講師を務めたいと考える。

## 4. 教頭によるN小学校への支援

教頭として赴任したN小学校は、教職員が15名、児童数が166名の小規模の学校である。各学年が1クラス、支援学級が3クラスの合計9クラスである。学校のICT活用に係る現状として、個別学習や協働学習での活用に課題があった。教頭として、一人一人の教員を支援することで、「教員のICT活用ステップ」を上げることがめざした。活用ステップの点検結果に基づき研修主任でICT活用が得意なO教諭と研修部でICT活用が不得手なT教諭を対象教員として抽出した。メンタリングの手法に基づき、教頭による当該教員の個別の支援計画を策定、実施した。

## 5. O教諭への支援

教員同士で参観し合う「公開授業」や自由参加型の研修会である「3m」の企画・運営に関して、O教諭に著者が支援した。O教諭が企画・運営する「公開授業」に対する「コーチング」や「モデリング」などを通して、校内の公開授業が活性化し、研修部や他教員のICT活用の促進につながった。さらに、O教諭による「3m」に対する「コーチング」や「ファシリテーション」を通して、教員が「3m」に参加しようとする意欲が全体として高まった。また、ICT活用を不得手とする教員のICT活用の促進につながった。

## 6. T教諭への支援

3回の公開授業や研究授業に関して、T教諭に著者が支援した。公開授業を中心に「コーチング」することで、T教諭のICT活用の促進につながった。また、T教諭と研修部の2名をつなげる「ファシリテーション」は、T教諭のICTを活用しようとする意欲を高めることができた。また、T教諭による研究授業に対して、継続的に「コーチング」を実施した。その成果として、研究授業に向けたT教諭の授業において、協働学習でのICT活用が実現した。一方で、研究授業後に、T教諭が積極的にICTを活用するわけではなかった。ICTを活用した実践を著者がT教諭にやってみせる「モデリング」が必要であったと思われる。

## 7. N小学校における支援の総括的評価

教頭による支援の成果と課題を明らかにするため、調査等を実施した。当該教員へのインタビュー調査から、O教諭への支援として、「コーチング」や「ファシリテーション」は有効であったと言える。とりわけ、T教諭への継続的な「コーチング」が最も効果的であった。二人の教員に共通して必要な支援として、「モデリング」のニーズがあることが明らかになった。また、ICT活用ステップにおいて、O教諭を「Step4 発展期」へと高めることができた。T教諭は、協働学習におけるICT活用が実践されるようになった。ICT活用教員全体へのアンケート調査では、児童用PCの活用頻度を大幅に高めたことや「ICTの効果的な活用について指導できている。」と捉える教員が増えた。学校長からも学校のICT活用の変容として、量から質へと転換が図られたことが認められた。

N小学校のさらなる効果的なICT活用に向けた、教頭の支援として、まずは協働学習における効果的にICTを活用した授業を示範授業として計画し実施していく。また、充実期から発展期に成長したO教諭や導入期から推進期に成長したS講師における個別の支援計画を策定した。